

翔太は、街の通りをあてもなく歩いていった。五限の数学が、めんどくさかった。頭痛がすると、保健室にいったり休もうとしたら、保健室のオバサンに、またさぼりでしょと文句を言われた。そこで言い合いになっていたら、担任がやってきた。「おまえ、どうしてそんなふうになっているんだ」と、また言われた。そんなふうって、どんなふうだよ。そんな理由を聞かれて、あんたは答えられるのかと、担任にくってかかったら、また言い合いになった。めんどくさいから、帰るといって学校を飛び出した。

こんな時間に家に帰ったら、ばあちゃんにうるさく理由を聞かれるだけだ。そして、母親に告げ口される。母親がまたキレる。そんなことは何度も繰り返してきた。母親がキレたって怖くも何ともないが、最後に泣かれてくどくど言われるのはめんどくさい。こんな家、早く出ちまいたい。(なんで、おれ、こんなふうになっちまったんだろ)

さっき担任に言われた言葉が、頭のすみに残っていた。小学校の時から両親のけんかばかり見せられて、それが嫌で夜のミニバスに通い始めた。同じころミニバスに入った紀之や奈奈と競い合って練習するようになった。バスケットにのめり込むことで、息詰まった家の空気から逃げ出した。中学校に入ってから、部活に熱中した。仲間と県大会をめざすことが自分の生きている実感だった。

それなのに、三年生になってこれからというときに、紀

之がやめると言い出した。いくら聞いてもあいつは理由を言わなかった。けれど、そんなことはわかっていった。本当はいつかやめると言い出すんじゃないかと、びくびくしていた。兄が有名進学校の中央高校二年生である紀之は、当然、そこを受験することになるだろうと予想はついていた。中央高校に受かるにはそうとうの受験勉強が必要だ。

紀之が部活をやめるといった時、「おれたちの目標はどうなるんだ」と責め立てながら、本当は、そんなことより自分だけが取り残されてしまう不安ばかりが、心の中を刺めていた。紀之は小学校の頃から、バスケットもうまいし、成績も良かった。自分はバスケットしかない。最後の大会を終えて部活を引退したら、全てがなくなっちゃう。そして、また、あの息苦しい家に戻らなきゃいけない。重い不安に押しつぶされそうになって、振り回したこぶしが紀之の顔面に当たっていた。謝ることもできないまま、それ以来、紀之とは話していない。

紀之がいなくなったチームは、市内大会で負けた。念願の地区大会に出場できず、夏になる前に、翔太たちは引退した。中途半端な気持ちで部活を引退した翔太は、抜け殻のようになつた。部活を引退した他のやつらは、自分のめざす進路に向けて気持ちを切り換えていった。それができない自分だけが、やはり取り残された。翔太は自分と同じように暇な仲間数人とつるむようになった。ゲーセンやカ